

6. 芳香稚草園（新潟県 栃尾市）

1. 研究代表者

園長 佐藤義尚

2. 保育園の所在地

新潟県栃尾市大町5番14号

(平成17年12月1日より新潟県栃尾市新栄町3丁目3番13号)

3. 定員数・入所児童数

現在90人定員であるが、12月より75名定員

入所児童数 86名

4. 保育園の沿革（園の紹介）

当園は新潟県のやまあいにある栃尾市（18年1月1日より長岡市に合併）、人口24000人の市街地にある保育園です。大正15年に起こった栃尾地区大水害の復旧作業により、子育てがおろそかになるのを懸念して初代園長夫婦が託児施設として隣接する本堂を開放して当園が発足しました。その後、地域の様々なニーズに応えるべく乳児保育、延長保育、子育て支援センター等の事業に取り組み現在に至っています。

昨年、平成16年は当園にとって激動の年になってしまいました。1月28日には先代園長突然の逝去。7月13日には80年前の大水害を彷彿する水害に見舞われ、当園も被害を被りましたが復旧に勤め、10月1日より既存園舎での保育再会にたどり着きました。やっと既存園舎に戻り喜びを子どもたちと分かち合っていたさなか、3週間後の10月23日に新潟県中越大震災に遭遇して、既存園舎での保育ができない状態となりました。その後現在に至るまで、仮園舎での保育を実施しています。

しかしながら、地域の方々、保育園関係者より保育園再建の声と、大勢の方々の励ましと協力により、12月1日に新天地に於いて保育園舎を移転改築し、新たな一歩を踏み出すことになりました。

当園の保育理念は「生命尊重の保育」。保育目標は「もっと素直になれたら

いいな、もっと感謝ができたらしいな」です。子どもたちと共に、地域の方々と共に、保護者と共に子育てを実現してまいります。

a. 研究の目的・概要

平成16年に遭遇した水害・地震。そのときに強く感じたことは、災害時にこそ食の大切さが実感できる機会だということです。

一言に食といいますが、常に当たり前の如くに食物を提供され、それを何気なく食べていることに関して我々は何も考えていなかったのが原状であると思います。よって、災害時の食に対する意識確認と、それに伴い普段から食に対する親子での話し合いを持ち、再度「いただける」事に関する感謝の心と普段からの準備について認識を深めることを目的としました。また、今般被災された多くの施設の施設長より災害当時の給食の心構え、自分が行ったことなどをお聞きし、施設間の災害時の食に対する認識を深めました。

b. 研究スタッフ

理事長 佐藤 義調

園長 佐藤 義尚

主任保育士 中村 文子

保護者会会長（消防署救命救急師） 今井 靖志

調理員 小林 玲奈

保育士 那須美代子

保育士 倉重 圭介

事務職 佐藤 順子

c. 研究の方法・研究会議の状況

研究スタッフでの食育についての認識確認を行った後、研究の進め方を検討しました。また、全ての研究スタッフが災害を体験している中に於いて、今後どのように食に対して取り組むかを模索しました。

当園園児、保護者別に、被災時の食を再現し、また、用意しておけばよかったものを実際に使い、それらの用途が適切に利用できるか、また、有効に食に対する保管がなされるかを実際に使用して確認し、今後へつなげることとしました。

ア. 研究の実施状況

今般の調査研究にさいしまして、食育というものの認識を調査させていただきました。そのなかで、食育という言葉は聞いたことはあるが、具体的には漠然としていて、何を称して食育というのかがわからないという意見が多数出されました。そのことを受けて災害時における食に関するアンケート調査を実施し、安全な食の確保と同時に食への認識を強いものとし、いただけるものへの感謝と、現在何気なく食べているモノが、発達へどのような関わりを持っているかを認識していただき、かつ、緊急時こそ食の充実を図ることによって子どもの、保護者の、地域の健全発達につながることを確認することを主眼に於いて、いまわしい思い出を再度思い起こすことの内容に配慮した中で食育の実践に入りました。

○子どもたちと共に緊急食の体験実践

平成16年に当園が体験した自然災害は水害・地震と子どもたちにとって忘れるこのできない災害が2度も続き、食に対するバランスが崩れる要因として顕著な災害に遭遇しました。そのなかで、保育現場に従事している者としても、子どもたちの食へのバランス、心の安定を確保していくためには大変苦労いたしました。支援物資の中に乳幼児が食する事のできる物は大変少なく、さらに火を使わなくては調理すらできない物であふれていたのを記憶しています。そのことをふまえて、今般避難訓練と同時に食に対する実地訓練も合わせて行いました。このことを行うにあたり、次のことに配慮し、実施いたしました。

1. 子どもたちの意識の中にある、水害・地震の思い出を膨張させない。
2. 子どもたち個々が体験したこととは違う環境の設定。
3. 保護者への本研究に対する啓発とサポートの依頼。

以上の3点を配慮項目として実施させていただきました。

朝9時30分園児の設定保育が始まった時間に大雨洪水警報発令と、全職員へ訓練情報を伝え、避難勧告もしくは園長判断で避難開始の連絡があったときの準備をしておくようにと伝達します。10時避難決行指示、子どもたちと共に避難を行いました。避難と同時に調理担当者と調理パート職員は緊急食を避難場所へ搬出して、食の確保を図ります。10時15分に避難完了し、各職員より子どもたちの状況確認を行い、園長より子どもたちにお話をしてもらいました。その内容として、「みんなの避難態度はすごくうまかったね」「先生は何で避難すると言いましたか」「これからこの場でご飯を作りましょう」といったなにげないもののなかに要点だけ伝えることに周知しました。それから非常食作りを子どもたちと共に実践いたしました。



排出した非常食。水、おでん（常温で食すことのできるレトルト）、水だけでできる五目ご飯

子どもたちにレトルトの袋を開けさせ、水を目盛りまで入れさせます。子どもたちの表情は真剣そのものでした。その後30分間待つのですが、その間はみんなで楽しく遊びました。そして、トイレを済まし、ウエットティッシュで手の消毒をし、完成したご飯を配膳します。子どもたちは自分が作ったものがどのように変化しているかを目を輝かせて見つめていました。そして、頂きますの言葉の後食事が始まりました。子どもたちは一口ご飯をほうばると「おいしい」という歓声が起きました。椎茸も入っているね、にんじんも入っているよなど、中にどのようなものが入

っているか日々に確認しながら食べていました。一人の子どもが、「地震の時これがあればよかったのにね」といったとき、職員はドキッとしたそうですが、子どもたちの顔はいまわしい思い出よりも、これからは準備が必要なのだという自分たちでの確認の表情と、みんなの手で作ったものへの（ただ水を入れるだけですが）達成感の表情であったという報告を受け、よかったです。

後日、保護者から連絡をいただき、「家でも非常時準備が必要」と子どもに指摘され、さらに「食べられるって幸せだね」という言葉が聞かれたという言葉を寄せて頂きました。



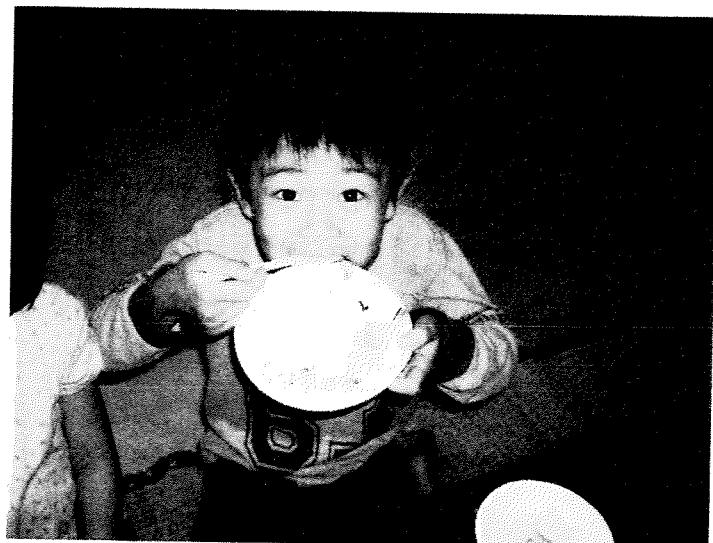
自分で袋を開けるところから行いました。【自分のものを調理する意識】



冷たい水で調理をしています。水も緊急時用の水を使いました。【水がなければ何もできない事への啓発】



完成したものを配膳して、これからいただきます。



おいしくいただきました。「卵は最後に食べるよ。」

○保護者と共に緊急食体験

食を提供するのは保育園では1食、家庭では2食です。また、家庭との連携が必要と考え、保護者と共に緊急食体験を行いました。

今回は保護者対象ということで、カセットコンロを利用した体験を行いました。それに合わせて、カンパンを子どもが食べやすいモノにどう調理したらいいかを当園調理師と共に実施してみました。メニューとしてはレトルトカレーと、お湯で暖めるだけでできるご飯を主に実施してみましたが、保護者も被災者であるために、

あのときこのようなものを時前に準備していたら、子どもたちにひもじい思いをさせることができなかつたのにという感想をいただきました。さらに、カンパンをお湯に浸し、離乳食もどきを作るという当園の調理師の発案から、さらに発展してレトルトのカレーのにんじんなどをスプーンで細かくつぶし、粉ミルクを混ぜてみるとおいしい離乳食ができるという発見もありました。

最後に、救命救急師である当園保護者会会長から、災害時に家庭に居れない仕事をしている私にとって、自分の家庭が心配で仕事に支障があつては困るため、つね日頃より家族で緊急時のことについて話をしています。しかし、今回のように食についての大切さに関しては妻に任せっきりになつていたように感じました。今後、夫婦で再度確認し合い、対応していくことが大切と感じました。

イ. 保護者・地域社会等の反応評価

今回の調査研究で、保護者からは食に対する認識が変わりましたという意見をいただきました。ただ緊急時に果たしてどれだけのものを持ち出すことができるかという不安があると言う意見を頂戴しました。

地域の意見としては、災害時に一番弱い子どもたちの食の確保は大切な課題であるということを前提として、炊き出しの味付け（塩分が多い）にも配慮が必要ではないかというご意見をいただきました。

ウ. 職員の協力体制と意見

調理員

食育という言葉を耳にして、食による子どもたちの発育と、そのことから子どもたちへの教育指導を関連づけるものと認識しています。しかし、災害時においてはそれがおろそかになりやすいのが原状であるため、本研究を通して職員、保護者との連携がいかに大切かを感じました。

保育士

箸、スプーン等の持ち方から、食材の流通経路まで幅広い分野が網羅されている

食育の世界で、本研究の主題である災害時の食育の調査研究をお手伝いできることは大変勉強になり、保護者、子どもたちの心の動きをかいしま見ることにもつながったと思います。さらに、我々保育士が災害時に感じたことは、子どもと共にいることが自分たちにとっての安定をいただけるものであって、大人だけの世界では不安が増大してしまうことに気付きました。

園長先生より、子どもたちの表情を的確につかんで報告をしてくださいという投げかけにとまどいを持ちましたが、進むうちにその意図するものが何かを認識できよかったです。

エ. アンケートの集計・分析・考察

今回は災害時における食生活のアンケートを採らせて頂きました。

本アンケートを集計した結果、保育園に通園している子どもたちは何とか恐怖心を払拭できて食から観る心的後遺症は少なかったように感じられました。しかし、今後保護者が緊急持ち出しの中に乳幼児に対する手だてを講じますかの質問に於いて、3分の1弱の人が用意しないという回答にたどり着いたことはショックでありました。しかし、保護者として子どもたちの心のケアについての問い合わせに於いて恐怖心を払拭することを大前提と考える保護者が多かったことと、恵まれない地域の子どもたち云々の、食に対する高揚を図るという結果により、いたわりの心の啓発にもつながることに感動を受ける結果となりました。

今回のアンケート回答家庭数591家庭

○被災地10園の施設長の意見

給食時に災害が起きたとき、施設長はどのような行動をとるべきか？

- ・ 災害の規模の確認

安全確保

的確な判断で指示をする

・調理員へはどのような指示を出しますか？

火を止め、元栓を止めて避難の介助

給食室の安全確認と、食品の点検

・災害終息後給食が可能の時施設長は子どもに対してどのような配慮を心がけますか？

落ち着きを取り戻すよう言葉がけをする。

寄り添う

職員と共に明るく振る舞う

施設長として、施設全体の把握に努めることと、担当部署など外の情報にも目配せをした中で、的確な判断が必要という相対的な意見がありました。また、育ちの中の食に対して、子どもが求める欲の一つであり、人間の根本欲の一つであるからこそ、大切に養っていかねばならないという意見であったと思います。

まとめ

今回の調査研究を進める中で、食育とは日常生活の中にある教育であることを感じました。そして、園だけではなく、家庭、地域の協力により成し遂げられる食の教育こそが大切であることを知ることができました。

災害時の心のバロメーターとしての食、子どもたちの、保護者の意識により如何様にもなる生活の根本である食を、様々な角度から見いだし、討論し、改善していくことがこれから世の中には必要とされていることだと感じました。さらに、少子高齢化が劇的スピードで進む現在に於いて、先人の知恵を学ぶ機会が少ない状況下の中においても食育の大切さを声を大にして訴えていかなければならないと思います。

災害時における食生活のアンケート結果

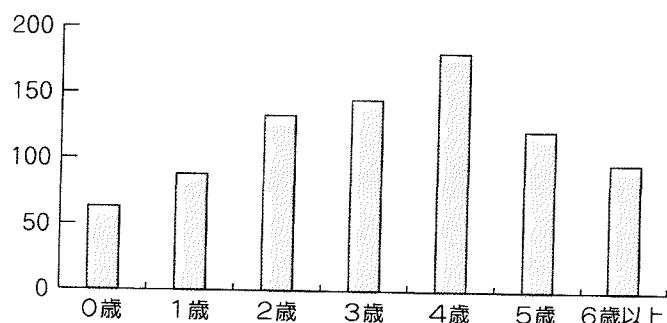
災害時における食生活についてお聞かせください

被災地域柄尾市・見附市10園591世帯調査

○ あなたのお子さんは被災時何歳でしたか、該当箇所に○をお願いします

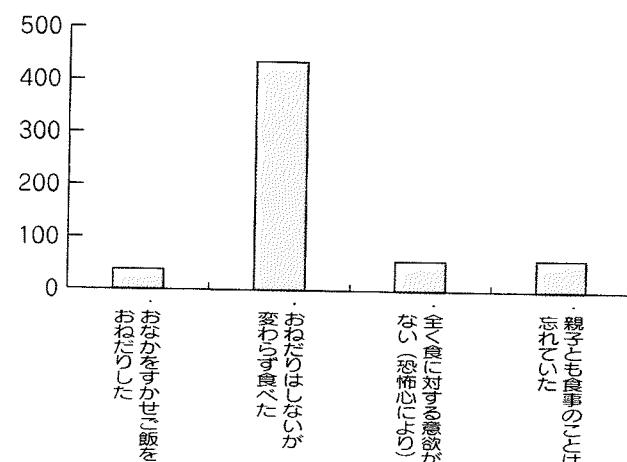
0歳	63
1歳	88
2歳	133
3歳	145
4歳	181
5歳	122
6歳以上	97

現在の在園児を対象に調査している関係で、
当時4歳児が多い（1年前の年齢を聞いて
います）。



○ 災害直後の子どもたちの食欲についてお聞かせください

- ・おなかをすかせたご飯をおねだりした 38
- ・おねだりはしないが変わらず食べた 435
- ・全く食に対する意欲がない（恐怖心により） 57
- ・親子とも食事のことは忘れていた 60



○ 災害時の食事をするときに乳幼児のいる家庭で必要なものをお聞かせください

(複数回答可)

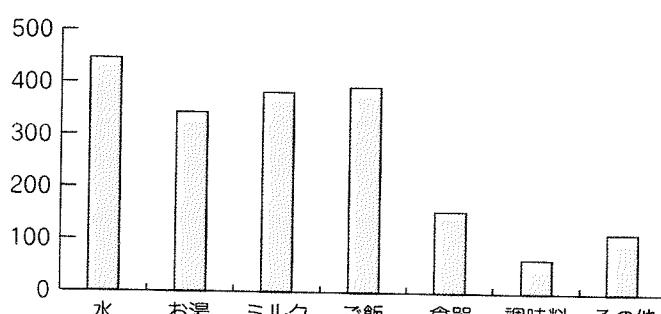
- ・水 446
- ・お湯 343
- ・ミルク 382
- ・ご飯 393
- ・食器 156
- ・調味料 65
- ・その他 115

他の具体的な例

離乳食を始めた子どものための食材を切る、碎く道具
お湯を注ぐだけで出来る離乳食etc

ビスケットなど

お菓子（気を紛らわす為）

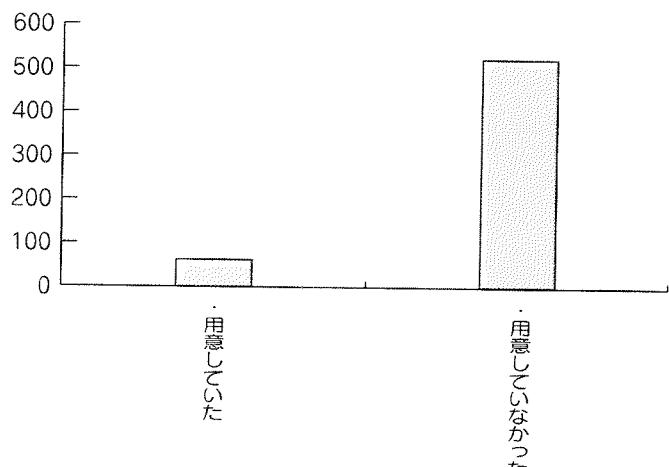


乳幼児用の離乳食、特に飲み物
ほ乳瓶（乳幼児用）
新生児用おむつ
果汁・麦茶
アイソトニック飲料
ミネラルウォーター
カップラーメン
コーンフレーク
おかずになるもの
ふりかけなど
海苔
飴
調乳用の水（お湯）一度沸騰したものがよい
ガスコンロなどの調理器具
ホットプレート
火（調理をするため パンやおにぎりでは、飽きてしまうから）
離乳食
離乳食のインスタント
ベビーフード
湯冷まし
タオル
缶詰
電気とガス（3～4日ガス電気が使えませんでした。）
汚さず食べられて、残っても後で再度食べられるもの
よだれかけのエプロン（代用品としてのタオルなど）
哺乳瓶
レトルトのおにぎりやパン食が続き、食欲が落ち心も弱くなりました
牛乳瓶
ストロー
サランラップ・アルミホイル
トイレットペーパー^一
野菜・肉
デザート・サラダ等の生野菜と果物
地域の方々との連携で持ち寄ったものを有効的に使用する
レトルトの雑炊
レトルトカレー
ジュース
野菜ジュース
小さめのタッパ
小さなスプーン
哺乳瓶などを洗う洗剤等
ガーゼ
布巾・ティッシュペーパー
しきり（周りを気にしないで食事をするため）
洗剤
おしぶり ウェットティッシュ
カセットコンロとガスボンベ
バナナ
果物
パン
ゼリー
お菓子・ジュース（限られた場所での調理での食事で食べない分を補うため）
薬を常用している場合、災害にこそ確実に服用させたいので、災害時のパニック時でも薬をスムーズに服用するためのオブラーートやゼリーなど。
おかゆ（災害時の配給がおにぎり、パンがほとんどで、離乳食中の子どもに対して提供することができなかった。）
救援物資には緑茶はあるが、乳幼児に対しては麦茶がほしい
あと片付けの際、水を必要としない食べ物

○ 緊急時における非常持ち出し物資を用意されていましたか

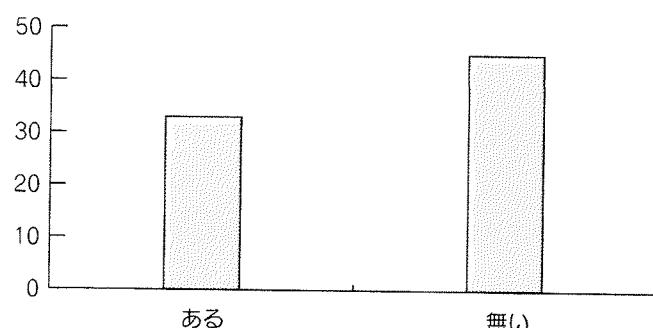
(該当箇所を○で囲んでください)

- ・用意していた 62
- ・用意していなかった 522



○ 用意していた方にお伺い致します。非常持ち出し物資の中に乳幼児用の緊急食料はありましたか (該当箇所を○で囲んでください)

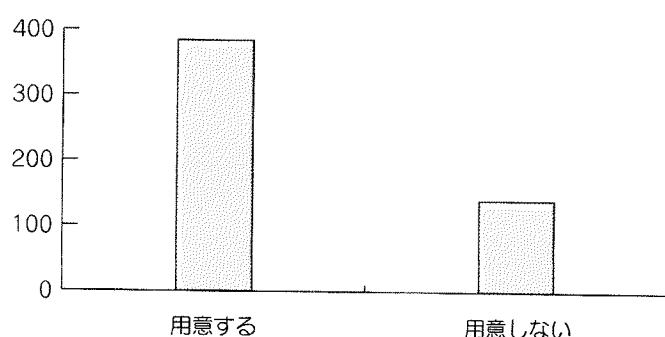
- ・ある 33
- ・無い 45



○ 用意していなかったとお答えの方にお伺い致します。今後用意しますか

(該当箇所を○で囲んでください)

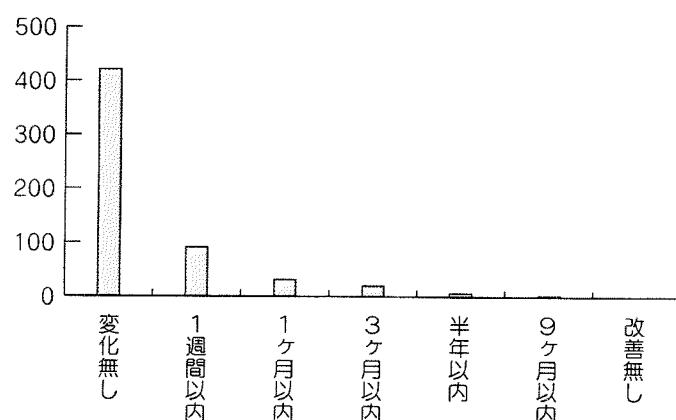
- ・用意する 384
- ・用意しない 140



○ 被災後のことについてお伺い致します。

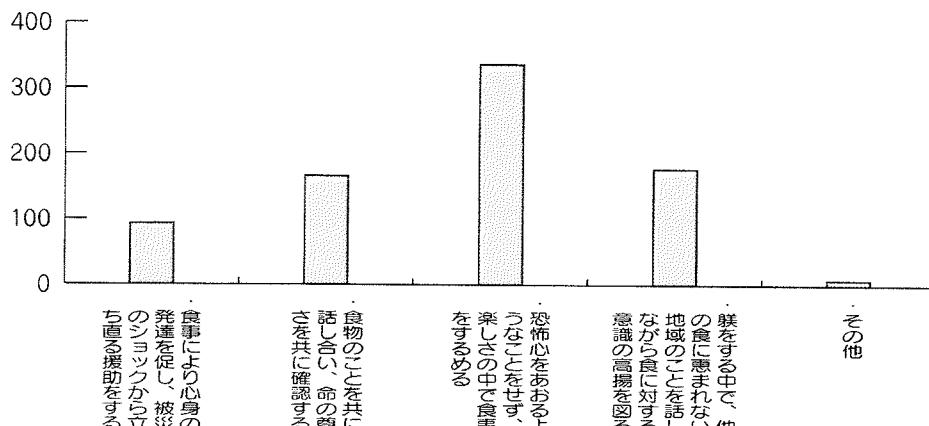
被災後お子様の食欲が回復されるまでの期間をお教え下さい

変化無し	421
1週間以内	91
1ヶ月以内	31
3ヶ月以内	20
半年以内	6
9ヶ月以内	1
改善無し	0



○ 災害後保護者として子どもの食に対するケアとして今後心がけなければならぬと思われることをお伺いします（該当箇所を○で囲んでください）

- ・食事により心身の発達を促し、被災のショックから立ち直る援助をする 93
- ・食物のことを共に話し合い、命の尊さを共に確認する 166
- ・恐怖心をあおるようなことをせず、楽しさの中で食事をすすめる 336
- ・駆ける中で、他の食に恵まれない地域のことを話しながら食に対する意識の高揚を図る 177
- ・その他 8



その他自由記述

災害発生時の子どもの年齢を考えると、当時は恐怖心をあおることをしないように心がけ、少しの物音にも敏感に反応してしまう子どもに、食事の時くらいは恐怖心から離れての楽しい食卓になるよう心がけました。

災害は必ず家庭で起こるとは限りません。むしろ保育園で保育時間内に起き、他と隔離され長時間保育を余儀なくされる場合もあるかと思います。

感謝の気持ちを共有する。

特に変化がないように見えて、子どもながらに心に傷を負っていることもあるので、食事に対してもっと関心を持っていかなければならないと思います。

まだ小さい二人（4ヶ月・3歳2ヶ月）とにかく食べさせなければと思いました。
水も濁り部屋中、ガラスの破片や壁が落ちたりで食べるよりどこが安全かを確かめるのが先でゆれてゆれてミルクのお湯もなくなりそうでした。